6 楽器を使用したワークショップ

私は楽器が好きです。中でも，音を出すためのユニークな工夫が凝らされたもの，通常とは異なるアイディアが盛り込まれたものに，特に興味を惹かれます。そして，直接的に音とは無関係としか思えないようなところに施された，装飾などにも非常に関心があります。

ピアノやバイオリン，ギターといった，「よく知られた」「普通の」楽器にはそれほど興味が湧きません。そんな楽器には，上手な演奏者や詳しい人が既に沢山いるからかも知れません。そして，そういった楽器は「正しい奏法」というものが確立されていて，それから外れたことをやると，それが偶然の事故（例えば音程を外す）であっても故意であっても，「間違い」であると言われるのが恐ろしい（と思い込まされている）。そのために「間違えないように」と緊張して，さらに「間違える」状態が生じます。

どういうわけか「音楽」というと，何かのお手本を，できる限り忠実になぞることをまず要求され，そのために大変な思いをする。これは，何かが（それこそ）間違っています。音楽とは，本来楽しいものです。字にそう書いてあります。そのことを再認識し，楽しむにはどうすればいいのか。そのヒントが，ユニークな民族楽器や創作楽器，音具といったものを深く知ることで，分かってくるのではないか，と思います。

1 演奏型のワークショップ

このような考えを持ちながら，楽器を使用したワークショップを考える時，どのような楽器を選んだらいいのでしょうか。

まず，演奏型といいますか，音を出して楽しむことを主眼とするワークショップの場合ですが，楽器の選択にあたっては，その操作が容易であることが必須条件となります。最初から，音を出すまでに長い道のりがかかるものは，相応しいとはいえません。そして，少し逆説的になりますが，単に簡単なだけでも面白くありません。簡単でありながら，ちょっとした発想の転換や，コツが必要な楽器が望ましいのです。同時に，参加者に応じた楽器の数や，演奏方法（例えば口に付ける）によっては，衛生面に気を配る必要もあります。

2 製作型のワークショップ

次に，製作型とでもいいますか，自分の演奏する楽器を自分で作るところから始める場合。これは，音楽表現の原初的な人間行動を再体験できるので，たいていとても面白いワークショップになります。この時も，どんな楽器を作るか，ということは非常に重要な問題になります。短時間で比較的容易に作れて（と同時に，ある程度の達成感を得られ），魅力的な音を出す楽器が理想なのは言うまでもありません。そして，会場・素材・工具などの問題をよく考えなければなりません。また，参加人数や目的によっては，製作補助員も必要になります。

このような創作，特に製作の場合，よく口にするのは，「人と違うものを作ってください」ということです。普通でしたら，何も言わなくても，出来上がったものは人と違っていて当然のような気もしますが，どういう訳か，周りを見回して，他人と同じようなものにしたくなる人が圧倒的に多いようです。とにかく，演奏型でも製作型でも，参加者の個性をできるだけ引き出すことが重要だと思います。

3 鑑賞・理解型のワークショップ

他に，鑑賞・理解型とでもいいますか，ユニー

クな楽器の演奏を聞き，その音楽や楽器，演奏技術について演奏者や解説者のお話を聞く，というのも重要な体験です。その際には，ただ演奏の上手な人に依頼するのも意義のあることですが，演奏はそれほど上手ではなくても，「上手に説明できる人」にお願いすると効果的な場合が多々あります。また，その人が別の言語の話者の場合には，その言語と文化に通じた上で，ワークショップでの共通言語にうまく置き換えることのできる人を探し出さなければなりません。

これらの「型」は，はっきりと区別できる場合は少なく，実際には組み合わせてワークショップを実施することの方が多いです。

4 口琴

演奏型の場合，私は口琴という楽器を選ぶことが多いです。口琴は，この 30 年間私がずっと興味をもち続けている楽器です。音楽事典などを見ると，「原始的な玩具楽器」などと書いてある場合が多く，あまり重要視されていないのが明らかです。しかしながら，そんな簡単なものではない，と私は思っています。

楽器の作りはとても単純で，金属や竹などの枠と，そこに取り付けられた（または切り出された）振動弁，この二つの部品しかありません。

そして，楽器自体の音はたった一つで，音量も小さく，また音高が変えられるわけではありません。「こんなもので，どうやったら音楽表現ができるのだろう」と思うのも当然です。

この楽器の実際の演奏に当たっては，人間の「口」が楽器の一部として大きな役割を果たします。口琴が出すたった一つの音を，口腔という，容積も形状も変えられる共鳴器に響かせることにより，音量・音色を変化させます。舌・鼻腔などの調音器官や息を駆使して，言語的な表現や，特定の倍音を強調した「疑似音高」による旋律を奏でることもできます。

通常の楽器と言うものは，音高が一つしかなかったら，別の音高を二つ三つと増やしていく。そんなものでは物足りなくて，ピアノのように 80 以上にまで増やす例もありますね。そういう方向へ「発達」をしていきます。

対して口琴は，「音高」はあくまで一つにこだわる。そして，そのたった一つの音の中に広がる「音色」の宇宙を探っていく，という全く方向の異なる「発達」に向かっている楽器だと私は考えます。

このような「音色」の音楽というものは，記譜すなわち紙に書き表すことが非常に困難です。一方「音高」の音楽は，音の高低を視覚的に上下で表現しやすい，という特徴を持ちます。楽譜が存在するかどうかで音楽の貴賤を判断する考えはどうやって刷り込まれるものか今でも厳然と存在しており，そのような考え方の人にとって見れば，楽譜に書けない口琴音楽のようなものは，取るにたらないもの，ということになるのでしょう。

もう一つの口琴の特徴は，この楽器が世界中，特にユーラシアの諸民族の文化の基層に必ずと言っていいほど存在していることでしょう。そして，民族によって，様々な音楽的表現をするための道具として使われているのです。日本では，アイヌ民族の竹口琴ムックリが比較的知られていますが，本州以南でも，平安時代の鉄口琴が合計 4 本，埼玉と千葉の遺跡から発掘されていますし，江戸時代には大流行して幕府に禁止されたことが，滝沢馬琴らによって記録されています。それぞれの民族文化の中では，ほんの片隅の存在とい

口琴。サハのホムスとアイヌのムックリ

う場合が確かに多いですが，人類全体の文化としてみると，口琴はとても重要な存在であると考えられます。このような存在の仕方をしている楽器は，他にあまり例がないと思います。中には，口琴を「国民楽器」と考える，東シベリア（ロシア連邦サハ共和国）に住むサハ民族のような例もあり，そこでは口琴は，鳥の鳴き声や動物の物音，水音などを模倣することにより，長く厳しい冬の後に訪れる「自然の目覚め」の喜びなどを音で表現します。

このような，常識を簡単に覆すことのできる楽器の演奏に挑戦することにより，ユニークな音楽表現を体験することができます。口琴は，最初はちょっとしたコツを摑むまで時間がかかる人もいますが，それを乗り越えると，かなり自由にいろいろな表現ができるようになります。そして，人それぞれに口の形も容積も違うので，たとえ楽器が同じでも必然的に他人とは異なる音が出ます。人間の身体が楽器の一部になる，ということが身をもって感じられます。

なお，子供向けの口琴の製作ワークショップができないか，という相談を受けることもあります。口琴の単純な外見から，そのような発言が出るのは分かります。しかしながら，実際に作ってみればすぐに分かりますが，金属・竹どちらとも，口琴の製作には熟練の職人技が必要です。子供どころか，大人でも少々細工の心得がある程度では不可能です。それは，口琴の音が，枠と振動弁の間の，非常に狭い隙間の空気を音源としているためです。この髪の毛ほどの精確な隙間を形作ることが，とても難しいのです。

5 親指ピアノ

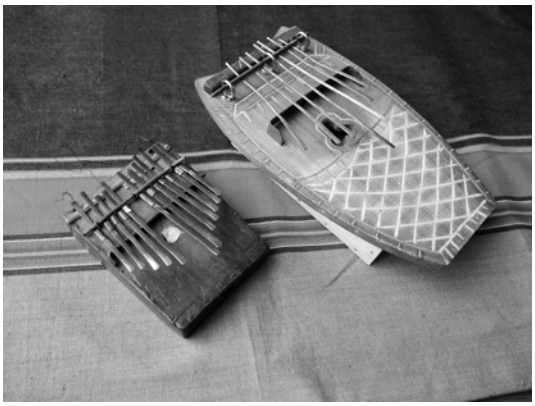
製作型のワークショップで私がよく取り上げるのは，親指ピアノと呼ばれる楽器です。サハラ砂漠以南の，いわゆるブラックアフリカと呼ばれる地域に見られる楽器で，基本構造としては，板や箱の上に，長さの異なる金属の細長くて薄い板（鍵盤）が 10 本前後並んでいます。

口琴と比べると，一見複雑そうな形をしていますが，普通に音がちゃんと出るものを作ることは，基本さえ守れば比較にならないほど簡単です。それは，親指ピアノの音が，鍵盤そのものから出る，ということと関係しています。一見似たような，振動体を持つ楽器でありながら，精密な空気の隙間を音源とする口琴とは大きく異なる点です。

私がこの親指ピアノに興味を持ったのは，この楽器の音の並び方が「普通」とは違うからです。鍵盤が V 字型に見えることからもわかるとおり，中央が一番低く，両外に行くにしたがって，交互に高くなる，という並び方です。通常，長さ（＝音高）の異なる物を，秩序を持って並べる場合は，左右のどちらかに一番長い（＝低い）ものを，反対側に一番短い（＝高い）ものを配置し，その間を長さの順番に並べます。では，親指ピアノは何故一見非合理的な並べ方をするのか。ここが，とても不思議に感じられたのです。

この楽器を作るワークショップのときには，本体となる板や箱を，参加者自身に持ってきていただきます。そして，鍵盤の音の並びも，特に指定せずに，自由に配置していただきます。もちろん，「真ん中が一番低い」という親指ピアノ本来の音の配置のユニークさは説明しますが，そうしなければならない，とは言いません。

そして，音とは直接関係のない，装飾に関しても，できる限りの独自性を盛り込むように要求し



親指ピアノ。タンザニアのもの（左）と，ワークショップ参加者の作品例（右）

ます。二人での演奏用，巨大な共鳴箱を持つものなど，個性的なアイディアは大歓迎です。

そこで出来上がる楽器は，当然ながら一つとして同じものはありません。そのような楽器の演奏方法も，決まったものがあるわけではなく，自分で見つけるのが自然だと思いますが，参考程度に，アフリカのある民族の親指ピアノ演奏の基本パターンを紹介することはあります。これも，そのとおりにする必要はなく，演奏者それぞれが自分なりにアレンジしていけばいいものです。

6 スタンピングチューブ

もっと手軽な製作〜演奏型のワークショップでは，スタンピングチューブを取り上げます。

スタンピングチューブというのは，東南アジアや太平洋地域などに見られる楽器で，言うなればただの竹筒です。片方が閉じていて，それ以外の節はすべて抜けています。ですから反対側の片方が開いています。その，閉じた方の底を地面や床面に打ち当てて音を出します。複数の演奏者が一人1本ずつ持って演奏したり，あるいは2本ずつを持って二人が演奏したり，極端な民族例では一人で両手両足に10本ほど持って演奏する，というのもあります。

私の場合，この楽器を，飲み物のアルミの空き缶を素材として作るところから始めます。カッター・缶切り・ビニールテープ程度のものを準備するだけで，簡単に作業ができます。

閉じた底を生かしたものを一番下にし，あとは全て筒状にして繋ぎ合わせていくのですが，その数も製作者の自由です。長さ（＝音高）の異なる楽器がいくつかできたら，それを使って遊びます。

遊び方・演奏の仕方には様々なものがあるのですが，ひとつご紹介すると，長さの異なるスタンピングチューブを1本ずつ持った四人が一組となります。それぞれが，〇×××〇×××…と，非常に単純なリズムを繰り返します。〇はチューブの上端が開いた状態，×では上端を片手で塞いで，音をミュートします。長い（＝低い）人から順に，一拍ずつずれて入り，同じことを繰り返します。

〇×××〇×××〇×××〇×××〇
〇×××〇×××〇×××〇×××〇×
〇×××〇×××〇×××〇×××〇××
〇×××〇×××〇×××〇×××〇×××

すると，ドレミファドレミファのように（もちろんチューニングはしていないので，ドレミファにはなりませんが），ミュートしていない音による階段状の単純な旋律が聞こえ出します。

面白いのはここからで，この旋律が聞こえ出すと，演奏者が，全体の中の自分の位置が分からなくなるのです。演奏している自分と，四人の共同作業で出している音を聞いている自分の，二つの人格（?）に分裂を始める，といってもいいかも知れません。

スタンピングチューブに挑戦

一人一人がやっているのは，実に単純なことの繰り返しなのですが，それが組み合わさって，体験したことのないような「複雑さ」を感じることができます。ピアノ演奏が標準以上に上手な人が，この単純な音楽を全く演奏できない，という場面に遭遇したこともあります。

音楽は，ちょっとしたやり方次第で，非日常的な体験をすることのできる，不思議なものです。「正解のある音楽」をひたすら追求するばかりでは，当然ながら「間違え」ます。「間違いのない」「単純かつ複雑な」音楽の存在と，その面白さを伝えていくことができるとうれしいです。

（直川礼緒）